

「アフメット・イフサンと

彼の見たオスマン帝国末期の出版事情」

指導教官： 林 佳世子

学籍番号： 8 5 0 1 0 3 2

南・西アジア課程トルコ語専攻

林 奈緒子

はじめに	2
第一章 アフメット・イフサンの生涯	4
1 幼少期	4
2 行政学院時代と出版者への道	5
3 出版活動の発展と文学革新運動の終焉	7
4 第二次立憲制成立期の活動	10
5 その後	14
第二章 専制政治期と出版界	17
1 検閲	17
(1) 政府年報	17
(2) 泉の絵	18
(3) 検閲長官フフズ・ベイ	19
2 ババ・タヒルとアフメット・イフサン	19
3 『科学の富』とテヴフィク・フィクレト	21
(1) 『科学の富』文学	21
(2) テヴフィク・フィクレトとアフメット・イフサン	22
終わりに	24
参考文献一覧	25

はじめに

オスマン帝国における民間の新聞刊行事業は、タンズィマートの時代に「新オスマン人」の一人、イブラヒム・シナースイが『諸情勢の翻訳者』(Tercüman-ı Ahval) によって確立された。そしてそれは次世代にも引継がれ、立憲制、専制政治期そして第二次立憲制期と、時代と共にいくつもの刊行物が生まれては消えながら発展していく。本論文では、それらのひとつである『科学の富』(Servet-i Fünun) 紙を、1891年から半世紀に渡って発行し続けた出版人であるアフメット・イフサン・トクギョズについて扱う。この新聞において、文学革新運動 (Edebiyatı Cadide) もしくは『科学の富』文学 (Servet-i Fünun Edebiyatı) と名づけられたひとつの文学の潮流がうみだされた。

『科学の富』紙は、1891年3月27日に創刊された週刊新聞である。創刊当初は、自然科学や健康など西洋から輸入された新しい知識についての記事が多く掲載されており、文芸色はほとんど見られない。またこの新聞の一番の特徴として、絵入りであったことが挙げられる。しかし、1895年の末に当時の文学の巨匠レジャイザーデ・エクレム¹を迎え、彼の仲介でテヴフィク・フィクレット²が参入したことにより、多くの若い作家らが『科学の富』に集まっていく。1896年から1901年の間、彼らは活発な文筆活動を行い、この5年間という短い期間に『科学の富』時代、または文学革新運動と呼ばれる、トルコ文学の歴史における一時代を築き上げた。

では彼らが活躍し始めた時代、オスマン帝国はどのような状況下にあったのか。19世紀はオスマン帝国がヨーロッパ列強の軍事・政治・経済的優位を認め、西洋化への一層の改革を試みられた時代だった。1839年、ギュルハーネ勅令が發布され、それに沿って政治機構、地方行政、司法、また教育など様々な分野においてタンズィマートと総称される一連の改革が行われた。この時代には対外貿易の拡大や一部の産業発展がみられたが、なによりも政府の慢性的な財政難は脱しがたいものであり、外国からの借款が相次いだ結果その破綻を迎えるなど、政治的改革は実際に成功したとはいえない結果に終わった。

しかし、教育分野においてはある程度の成果があったといえる。それまでウレマーによるムスリムのための教育機関のほか、タンズィマート以前にはいくつかの軍事学校も設立されていたが、タンズィマート時代にはフランスの助言を得ながら非軍事的な近代的教育機関が整備され、帝国各地で公教育が進められた。また1859年に行政学院 (Mektebi Mülkiye)

¹ Rezaizade Mahmud Ekrem (1847-1914) : イスタンブル出身。外務省から国家評議会 (Şura-yı Devlet) のメンバーとなった後、ガラタサライ・リセや行政学院で文学を教える。第二次立憲制の後は教育大臣となり、また上院議員となった。詩や小説、戯曲、批評論など多数の文学作品を残している。(Ahmet İhsan Tokgöz, *Matbuat Hatıralarım*, Alpay Kabancı haz. İletişim Yayınları, İstanbul, 1993. 以下 M.T, p.264.)

² Tevfik Fikret (1867-1915) : イスタンブルに生まれる。ガラタサライ・リセで学び1901年まで多くの詩や文学作品を書いた。第二次立憲制成立からしばらく後、文学活動から遠ざかりガラタサライ・リセの校長となった。またロバート高校 (Robert Koleji) でも教鞭をとっている。(Vasfi Malif Kocatürk, *Büyük Türk Edebiyatı Tarihi*, Edebiyatı Yayınevi, Ankara, 1970. 以下 E.T, p.725.)

が設立され、ここでは中等教育を修了した者が後に官僚となるべく高等教育を受けた。本論で扱うアフメット・イフサンもこの学校で学んだ一人である。1868年にはガラタサライ・リセも設立され、これらの教育機関から帝国に多くの指導者が輩出されていった。

一方で、帝国各地で起こっていた叛乱は独立運動の性格を帯び始めており、1829年にエディルネ条約が結ばれギリシアが独立し、ワラキア、モルダヴィアも自治を獲得した。その後エジプト問題が落ち着いた後しばらくは、オスマン帝国は対外戦争に巻き込まれることなく改革を進めていく。しかし世界を覆い始めていた民族、自由、独立を求める潮流は帝国内の各地で叛乱を引き起こしていたし、西洋列強は国境内に豊かな資源をもつこの帝国を分割しようとしていた。新オスマン人と呼ばれる人々が改革の批判勢力として、反政府活動を行ったのもこの時代である。彼らの多くはエリート階級に属した人々で、政府の改革の現状を批判する言論活動を行い、新しい思想をもった若者層を育てていく。

このように国の内外からかけられていた圧力に対して、政府は対策を講じなければならなかった。1878年にアブデュルハミト2世（在位 1876 - 1909）が即位すると政府の抑圧はますます厳しさを増し、時代の若者が一層自由を求める機運を生むことになる。1878年に露土戦争が終結したが、その際のオスマン帝国の損失は甚大なものだった。ブルガリア、ルーマニア、セルビア、モンテネグロにそれぞれ公国がつくられ、ボスニア・ヘルツェゴビナはオーストリアに占領された。（科学の富文学を形成した世代は、ロシア軍のアヤ・ステファノス（現在のイェシルキョイ）への侵攻とこの講和条約による多大な領土損失を、子供時代の最初の苦い思い出として味わったのである。）

アブデュルハミト2世の治世は、前代以来の近代化が一層進められた時代ではあったが、専制政治が敷かれたことも間違いない。本論文では、密告が横行し、厳しい言論規制が行われたこの時代に、文学のひとつの潮流をもうみだした『科学の富』をアフメット・イフサンがどのように発行していたのか、当時の出版事情に照らしながら明らかにしたいと思う。論文の構成は以下の通りである。まず第一章でアフメット・イフサンの生涯を紹介しながら、彼がどのように出版人としてのキャリアを培っていったのかを考察する。第二章では、『科学の富』紙も含めたイフサンの印刷・出版活動に焦点を当て、とくに専制期の出版界をいくつかの具体例とともに見ていく。おもな参考文献は *Matbuat Hatıralarım* (1993) である。1928年、アフメット・イフサンは60才のときに『科学の富』に週に一回ほどのペースで自身の回想文を全48章にわたって掲載し始めた。これは1930年から翌年にかけて、二巻にわたって製本出版されているらしい。しかし、この二巻を手に入れることは現代では非常に難しいという。この二巻作りの本が一冊にまとめられ、出版されたものが *Matbuat Hatıralarım* である。この本では編者のアルパイ・カバジャルによって豊富な注が加えられ、また一般人の回想録であることから、歴史的に間違いであることが明らかな記述については訂正がなされている。³

³ M.H, pp.5-7.

第一章 アフメット・イフサンの生涯

アフメット・イフサン・トクギョズは、オスマン帝国末期から共和国初期の時代にかけて活躍した出版人である。トルコにおける印刷技術の革新に努め、出版業発展の先駆者ともなった。行政学院に学び、官僚への道が開かれていたにも関わらず、彼は幼い頃から「作家と印刷屋になること」を夢見ていたと回想している。⁴ この章では彼の回想録を主な参考文献として、アフメット・イフサンが出版人としてのキャリアをどのように築いたのか、第二次立憲制の成立時までを中心に見ていく。また、彼がどのような思想をもった人間だったのかについても考察したい。

1 幼少期

アフメット・イフサン・トクギョズは 1868 年、エルズルムで生まれた。イスタンブルの名家の生まれで、彼の父親がオスマン帝国の会計士・財務官であったため、帝国の各地を移動しながら成長していった。1876 年、中央ではスルタン・アブドゥルアズィズが退位し、ムラト 5 世が即位した年に、一家はダマスカスへ移り住む。イフサンはそこで父親の親友で、当時シリア財務局長官であったスレイマン・スーディ・エフェンディと出会った。イフサンの父とは対照的にヨーロッパに非常に通じた人物で、家の造りや生活様式もすべて西洋風だったという⁵。イフサンの教育に関心を払い、特にフランス語を学ぶよう助言したのは彼だった。スレイマン・スーディとの出会いは、イフサンにとって第一の「西洋との出会い」であったと言えるのではないだろうか。

その後、イフサンはダマスカスの陸軍幼年学校で数学や地理、言語学などを学び、フランス語も上達させる一方、学校を終える 3 年目にはアラビア語も現地の友人らと同じように話せるようになったという⁶。1881 年、一家はダマスカスからアンカラへ移り、翌年には父親が財務議会のメンバーとなったため、イスタンブルへ戻った。スレイマン・スーディはそれより以前に財務委員会 (Şura-yı Maliye) のメンバーとなっていた。彼は再会した折り、イフサンのフランス語に大変満足したという。そして自身の蔵書の中からフランス語の辞書や技術、歴史、また古典作品など総数 50 冊以上の本を積み上げ、彼にそれを与えた。次に扱う行政学院時代、彼が「すべての書店にある本を読破した」のは、彼が読書好きであったというよりは、そもそも書物の数が少なかったことに起因しているといいたいだろう。その点でも、スレイマン・スーディの与えたこれらの本は、イフサンが「生涯を通じての大切な財産になった」と後に述べているように、彼の知識の拡大に大きく寄与したものと思われる。

⁴ M.H, p.29.

⁵ M.H, p.17.

⁶ M.H, p.21.

2 行政学院時代と出版者への道

回想録では「行政学院で学んだ5年間は、私の人生の最も幸福なときのひとつであった」⁷と語られる。行政学院の教師陣にはミザンジュ・ムラトの名で知られているメフメト・ムラト⁸、レジャイザーデ・エクレム、ハキムバシュ・サリフ⁹、ポルタカル・パシャ、サクズル・オハネネスなどの人物がおり、彼らはイフサンら若きエフェンディらに「文明の道」を示した。

ターバンを巻いた先生や父祖から聞いた無駄な信仰、つまり曲解された運命やカナート、儂い世の中といった考え方が無駄であることを、そして西洋で発達した科学技術的見解を利用して調査・分析することが必要な問題を中世の頭で考えることの危険性を我々は学んだ。(中略)我々の父祖のもつ見解や信仰とは反対の思想を私たちは得たのである。¹⁰

こうした考えはスルタン・アブドゥルハミト2世を恐れさせ、後に校長アブドゥルラフマン・シェレフ・ベイ¹¹をはじめ、多くの教師がこの学校を追われた。しかし、その後も行政学院から「文明への光」を目指して多くの人材が育てられたことは、タンズィマート期に始まった教育改革が、後戻りできないまで進んでいたことの表れであったと思われる。

1878年から『真実の翻訳者』(Tercüman-ı Hakikat)紙を刊行していたアフメット・ミドハト¹²は、当時の文学青年らのリーダー的存在であったといえる。『真実の翻訳者』から記事を選んで、その「選集」を出す者たちもおり、後にイフサンの同志・親友となる学友のマフムド・サードウク¹³もその一人である。当時、イスタンブールの書店はバーブアリー通りにあった「エサド・エフェンディ書店」以外はすべてアルメニア人によって経営されていた。彼らは作家や翻訳家から作品を買い取って出版しており、シェムセッディン・サー

⁷ M.H, p.30.

⁸ Mehmed Murad (1854-1917)：外務省の出版局(Hariciye Nezareti)に勤めた後、行政学院で教える。1886年に“Mizan”(秤)を刊行する。(M.H, p.264.)

⁹ Hakimbasi Salih(1816-1895)：軍医学校や行政学院で植物学を教える。オスマン医学協会(Cemiyet-iTibbiye-iOsmaniye)の設立と、医学用語のトルコ語訳に貢献した。(M.H, p.264.)

¹⁰ M.H, p.31-32

¹¹ Abdurrahman Şeref(1853-1925)：イスタンブールに生まれる。行政学院やガラタサライ・リセで学長を務める。第二次立憲制の後、大臣職や国家評議会議長となった。1923年にイスタンブール国会議員としてトルコ大国民議会(TBMM)に加わった。(E.T, p.717.)

¹² Ahmet Midhat(1844-1912)：ドナウ州知事であったミドハト・パシャの刊行した新聞『ドナウ』(Tuna)の責任者を務めた後、自身で出版業を始める。1873年、ロードス島に流され、1876年、恩赦が出てイスタンブールへ戻る。1878年に『真実の翻訳者』を創刊した。(E.T, p.703.)

¹³ Mahmud Sadık(1864-1930)：行政学院に学び、ドイツに留学する。官僚や教師の職にも就いている。多数の雑誌・新聞に作品を寄稿した。1917年、Matbuat Cemiyetiの初代所長となる。(M.H, p.267.)

ミー¹⁴ のフランス語辞書も、このような形で世に出された。当時フランス語を学ぶものにとって、彼のフランス語辞書はまさに命綱であったという¹⁵。マフムド・サードゥックと同様、イフサンも在学中に翻訳家としての活動を始めた。彼は『真実の翻訳者』にも翻訳作品を投稿したが、それがアフメット・ミドハトに認められるところとなり、毎週、雑誌に翻訳記事を寄稿した。しばらく後には彼の記事の「選集」も出版されたという。

イフサンは 1887 年に行政学院を卒業し、まず父親のいたカスタモヌ県で、県知事アブドゥルラフマン・パシャ付きの翻訳者となった。数ヶ月後、父親がブルサに移動するのを期に、イスタンブルへ戻り、本格的に作家業に取り組むため、まず『世界』(Cihan) 誌に記事を送った。「その内容や表現方法が時代遅れでなく、西洋の手法を取り入れていたため『世界』誌を選んだ」¹⁶ とイフサンは述べている。

アブドゥルハミト 2 世の時代の検閲は非常に厳しく、数多くの雑誌・新聞が創刊から短期間の内に廃刊にさらされていた。そのため、『科学の富』の出版を始めるまでの短期間のうちにさまざまな試行錯誤がなされた¹⁷。

『世界』が廃刊になるとイフサンは、今度は自ら教育省調査査察委員会 (Maarif Nazareti Encümen-i Teftiş ve Muayenesi) から許可を得て、1887 年 11 月 4 日、『開発』(Umran) を創刊した¹⁸。この雑誌が出版できたことは、当時、調査査察委員会のメンバーだった、アズミ・ベイとラクム・ベイに負うものであるとイフサンは述べている¹⁹。イフサンの『開発』を担当した彼らは、その委員会で唯一の行政学院出身の官僚であり、啓蒙活動に積極的であったという。しかし 1888 年、アブドゥルハミトが帝国に張り巡らした密偵が出版界を襲い、スルタンの命令によって数多くの雑誌や小冊子が廃刊に追い込まれた。『開発』もこのとき 29 号をもって廃刊となった²⁰。

イフサンは出版業から離れないようにと、別の印刷所でジューヌ・ヴェルヌの小説の翻訳出版を続ける傍ら、そのころトプハーネ大臣の通訳も務めた。ヴェルヌ作品の著作権を持つヘッツェル社と契約を交わして挿し絵も取り寄せたが、絵入りの小説が出版されたことはイスタンブルの出版界ではひとつの重大事件であったとイフサンは述べている。彼の翻訳したヴェルヌの作品には『80 日間世界一周』、『秘密島』、『海底冒険』、『キャプテン・グラントの子どもたち』などがある。

ヴェルヌの翻訳小説が好評を博したことはイフサンの知名度を高めた。アラケルという

¹⁴ Şemseddin Sami(1850-1904) : アルバニアに生まれる。Yanya で学び、ギリシア語、フランス語、イタリア語を習得した。官僚を務めながら作家・出版業に携わる。Trasblusgarp に流され、一年後イスタンブルへ戻り、1890 年から亡くなるまで、(Teftiş-i Askeri Komisyonu) の秘書頭を務める。1882 年に仏土辞書を刊行した。(E.T, p.718.)

¹⁵ M.H, p.34.

¹⁶ M.H,p.41.

¹⁷ M.H,pp.42-53.

¹⁸ M.H,p.42.

¹⁹ M.H,p.43.

²⁰ M.H,p.210.

名の出版人が彼の翻訳小説を購入しており、その後二人は共同で印刷所の経営を始めた。これは成功を収めているが、イフサンが望んだことはあくまで「新聞の発行」であったという。およそ一年後、ヴェルヌの翻訳小説をより安価で提供する印刷所が現れたことから経営にかげりが見えていたころ、アフメット・ミドハトが彼に興味をもった。そしてイフサンと協定を結んで印刷会社の共同経営を始めようとしたのである。もしこれが成功していれば、アフメット・イフサンの『科学の富』ではなくアフメット・ミドハトの『真実の翻訳者』が発行され続けた可能性もある。しかしこれは短期間で失敗に終わった。契約書の内容に不満を持ったアフメット・ミドハト側の人間が、この契約を無効としたためであった。イフサン側の印刷所がどうなったのかははっきりとしていないが、イフサンは印刷所に戻って翻訳出版を続けることはしなかった。当時、新聞の新規刊行は禁止されていた。しかし先に述べたとおりイフサンは新聞の発行を強く望んでいたため、既存の日刊紙の付属誌として自身の新聞を刊行しようと考えた。この付属紙が『科学の富』の前身となる。

『富』(Servet) 紙の所有者である D・ニコレイドはギリシア人で、『富』は当時イスタンブルで出されていた唯一のトルコ語の夕刊だった。イフサンは以前この新聞で通信社のフランス語翻訳をしていた縁で、ニコレイドと交渉し、『科学』(Fenni) の刊行を始めた。それから間もなくイフサンは自分の印刷所を立ち上げ、そこで『科学』の印刷を行っていたが、それとほぼ同時期に経営難から『富』が廃刊となった。ニコレイドは他紙に移ったため、出版権だけが後に残った。それがイフサンの『科学』に譲渡されて、『科学の富』の出版が始められたのである。

3 出版活動の発展と文学革新運動の終焉

1891年3月27日、『科学の富』の第一号が出版された。イフサンは当初から絵の掲載に力をいれており、ヨーロッパで新たに発明された亜鉛版印刷技術の導入を決意する。1891年5月2日にイスタンブルを出港し、印刷技術の調査・習得のため、およそ三ヶ月にわたってパリ、ロンドン、ウィーンなどを訪れた。この旅行は私費で行われたため資金調達が一番の問題であったが、イフサンはアフメット・ミドハトが一年前に出版していた彼のヨーロッパ旅行記に目をつけ、帰国後に自身の旅行記を出すことでそれをまかなおうと考えた。実際、彼の出版した旅行記²¹は好評を博したらしい。パリでは絵を印刷するのに適した用紙を購入し、またウィーンの印刷所と契約し、彼がイスタンブルから送った写真の活版が、その印刷所で作成されることになった。帰国後、ヴェルヌの小説翻訳と、『科学の富』の出版を続けたが、その頃、『科学の富』がスルタン・アブデュルハミト2世の目にとまる。

その頃、印刷所の中にはスルタンの「お気に入り」となり、宮廷からの仕事を優先的に

²¹ *Avrupa'da Ne Gördüm*, n.p., 1901.

引き受ける所もあった中で、アフメット・イフサンもしくは『科学の富』紙と、宮廷間の関係は非常に少ない。やむを得ないこととして彼らが宮廷と関わりをもった事柄は次のものである。

- ① 1891年、内務省から『科学の富』に予算がついた。これがオスマン帝国初の、政府から新聞に対しての資金援助であった²²。このことに関しては1982年1月1日付けの官報で公示がなされている²³。その額は当初月間3240クルシュで、それでも十分なものではなかったが、その後15パーセントの削減がなされ2754クルシュ、またしばらく後には更に15パーセントの削減によって2453クルシュとなった。一方で他紙に対しては、『科学の富』の数倍の額が支給されていた。また、その他どこの機関からも援助金を受け取らず、この小額の資金が唯一の政府との金銭関係であったという²⁴。また、共和国成立時に至ってイフサンは、「出版の自由を手にいれた」ことを理由に、2453クルシュの支援金受け取りも打ち切っている²⁵。
- ② 1892年から1893年にかけて、『科学の富』に掲載されるべくアブデュルハミト2世から数枚の絵が贈られた。(パリのアナーキストによる警官殺害事件、アメリカ合衆国議員のスキャンダル、アメリカにおける黒人への私刑罪適用などがある。²⁶) これらの絵の目的は、外国のメディアによるオスマン帝国への批判に対する返答であり、自国だけでなく他の国々でも凶事はあるということを示すこと、また議会の価値を貶めることであったと推測される。
- ③ 1892年、印刷所で働かせるため、フランスから彫刻師が招聘された。しかしポーランドからの亡命者であった彼はフランス語の読み書きができず、またカピチュレーションの意味するところを理解すると働かなくなった。後に政治に関わるような動きを見せたため、アブデュルハミト2世の命により手切れ金が用意され、彼はイスタンブルから追放された²⁷。
- ④ 『科学の富』が停刊処分を受け、イフサンは法廷に送られ、作家らが解散させられた。
- ⑤ すべての新聞同様、専制政治期に厳しい検閲と検査に束縛された。

以上の5点が挙げられる。特に金銭面で宮廷に縛られていなかったことは、『科学の富』を出版する上でイフサンに一定の「精神の自由」をもたらしたといえる。

1898年にイスマイル・サハ²⁸、ウベイドウツラー²⁹など『科学の富』の作家らがイスタン

²² M.H, p.62.

²³ M.H, p.64.

²⁴ M.H, p.259.

²⁵ M.H, pp.259-260.

²⁶ M.H, pp.67, p.258.

²⁷ M.H, p.66-67.

²⁸ İsmail Saha (1866-1901): メッカに生まれる。早くに両親を亡くし、学校を出た後、官僚になる。アブデュルハミトによって流刑に逢い、スイヴアスで心臓病のため亡くなる。(E.T, p.700.)

²⁹ Ubeydullah Hatipoğlu (1857-1937): メドレセで教育を受けたのち医学校で学ぶ。流刑となり順にエジプト、ヨーロッパ、アメリカで暮らし、第二次立憲制の成立とともに帰国する。第一次大戦後、イギリスによってマルタ島に流される。その後トルコ大国民議会に加わり国会議員となった。(M.H, p272.)

ブルを追われた。ケープ植民地のイギリスに対する独立運動に関して、スルタン・アブデュルハミト2世がイギリスを信用していなかったことも作用し、多数のオスマン帝国の知識人らはイギリスの側についていた。上にあげた作家らがイギリス大使館への支持を示すデモに加わっていたことがスルタンの知るところとなったのである。イフサンは後にこのことに対して、彼自身も含めて「トルコの知識人はひどく盲目になっていた」と述べている³⁰。このことは彼らに混乱をもたらし、文学革新運動はその全盛期を終え、徐々に勢いを失わざるを得なくなった。イフサンも危険から逃れるため、行政学院時代の学友であり、宮廷侍従をしていたアリフ・ベイの助言を受けて、アフルカプにある材木工場の工場長になり出版業から一時離れた。この際、イフサンがイスタンブールの役人として働くことに違和感を示したため、アリフ・ベイは工場を株式会社に変え、イフサンがその会社の株主という形で工場に入れるよう計らっている。この間、印刷所の責任者が誰であったかは定かでないが、ヒュセイン・ジャヒド³¹、メフメド・ラウフ³²によって文学活動が続けられていた。その後2年近くにわたって工場で働いたことで、イフサンはイスタンブールの市場と経営のノウハウ、商業・産業世界の現実を学び、その見解が広げられることになる。このことは後に彼の印刷所経営の手法に大きく貢献したと思われる。

1901年、イフサンが工場から出版業へ戻った頃、『科学の富』はババ・タヒルの密告に見舞われて『科学の富』は停刊処分を受けた。ババ・タヒルについては第三章で扱う。イフサンとヒュセイン・ジャヒド、そして彼らの担当検閲官フズ・ベイへ犯罪法廷への召喚がなされていたため、よくある「一時停刊」とは事情が違っていたといえる。密告の内容は、「ヒュセイン・ジャヒドの『科学の富』に掲載された記事に、フランス革命における王と王妃の処刑について書かれており、パーディシャーに対して反抗を促す内容が見られる」³³というものだった。このときヒュセイン・ジャヒドが書いたのは『文学と法律 (Edebiyatı ve Hukuk)』という題のフランス語論文の翻訳だったが、実際に紙面にあるのは1789年という年代だけだった。このことが裁判所の役人らの知るところとなり、尋問が取りやめられることが決定された。40日を超える閉鎖の後『科学の富』は再発行が許されたが、もはや各地に離散・転身した作家らと呼び戻すことはできず、イフサンは新たに出版活動を続けていくことになる。

³⁰ M.H, p.87.

³¹ Hüseyin Cahit Yalçın (1874-1957) : バルケシルで生まれる。国会(Meclis-i Mebusan)にイスタンブール議員として加わる。第一次大戦の後、イギリスによってマルタ島に流される。共和国時代になってからは雑誌や新聞を刊行した。(E.T, p.740.)

³² Mehmet Rauf (1875-1931) : イスタンブールに生まれる。海軍学校で学び、一時期、海軍将校を務めた後、執筆生活に入る。(E.T, p.738.)

³³ p.90 Mehmet Rauf (1875-1931) : イスタンブールに生まれる。海軍学校で学び、一時期、海軍将校を務めた後、執筆生活に入る。(E.T, p.738.)

4 第二次立憲制成立期の活動

アフメット・イフサンは第二次立憲制の宣言がなされてからしばらくの期間、民衆と政府の橋渡しのような役割を多く務めている。1901年に文学革新運動が解散してから第二次立憲制の成立まで、イフサンは友人のマフムド・サードゥクと二人で『科学の富』の出版活動が続けていた。農業や産業、技術開発事業、医学や芸術などが論じられ、イフサンは文学と時事欄の埋め合わせとして絵に一層の重要性をおき、その頃イスタンブルになかった色つき絵の印刷を始めた。作家らが解散してから、『科学の富』は採算の取れない状態であり、宮廷からの援助金と印刷所の収入でその出版が続けられていた。また、既に郡長や県長として各地に散っていた行政学院時代の学友らがイフサンに定期購読者を紹介していたことも彼の収入を支えていたという。そのほか、イフサンはコーランの印刷も始め、また、政府の行った人口調査用紙の印刷も引き受けている³⁴。

1907年にアフメット・イフサンは、「統一と進歩委員会」の一員となった。サロニカからの使者は以前『科学の富』で働いていた弁護士のバハ・ベイであった。彼から委員会のメンバーに加わるよう話が持ち込まれ、これを承諾したのである。マフムド・サードゥクも同じ頃この組織に入っていたが、互いに立憲制の成立まで秘密にしていた。イフサンはこの組織に入ったことについて次のように述べている。

改革の行動が起これば、私はすぐに『科学の富』を日刊紙にして、改革の成功のために働こうと決意した。この約束をして誓いをたててから、体と魂に軽やかさと幸せを私は感じた。³⁵

1908年7月23日、青年トルコ人革命が起こりアブデュルハミト2世は憲法の復活を宣言する。この日は木曜日だった。イフサンらイスタンブルの人々がそれを知ったのは金曜の朝である。つまりその日は休日で、公の事務所がすべて閉まっていたため誰に何を聞くこともできない状態だった。イフサンは旧友のアリフ・ベイを訪問するが、彼はすでに宮廷から引退しており、詳細は何も知らなかった。土曜になってイスタンブルへ戻ると、彼はすぐにバハ・ベイとの約束を履行し始めた。イフサンは「統一と進歩委員会」に加わってしばらく後に、印刷所をバーブアリーの真向かいに移していた。ここは情報の収集という観点からは彼らに好条件の立地だったといえる。憲法復活後、イフサンとマフムド・サードゥクはコーランや人口調査用紙の印刷などほかの仕事をすべて放棄し、7月26日、『日刊科学の富』を創刊、出版し始めた。憲法の復活が宣言されてから、イスタンブルの町同様、彼の印刷所も大混乱だったという³⁶。そのときの様子を以下に引用する。

³⁴ M.H, pp.106-108.

³⁵ M.H, p.119.

³⁶ M.H, pp.129-130.

私たちの印刷所も大騒ぎだった。100部だけを印刷できる2つの機械は朝から晩までまったく止まらずに稼働していた。24時間で25,000部を印刷したのだがこれも十分ではなかった。印刷所の門で、そして傍にある配達部屋の窓の前で、新聞配達人らが大騒ぎをしていた。鉄の手すりつきの窓によじ登った彼らは、壁を穴だらけにしていた。印刷所内の人たちは印刷済みの新聞を運んで配達人に配った。だが、それらを数えたり勘定したりはしなかった。私たちは書き、機会は印刷し、配達人が配り、人々はそれをひたたくりあっていたのだ³⁷。

イスタンブルがこのような興奮の中にあつたとき、7月27日、宮廷がベイオール長官ハームディ・ベイを警察長官（Zaptiye Nazırı）に任命する記事が新聞に載った。この記事は冷水を浴びせられたようだったという。なぜならハームディ・ベイがスルタンの忠実な僕であることはよく知られており、彼がアブデュルハミトの用意した「自由運動へ火消し」であったことが用意に想像できたからである。このことに対して、当時イスタンブルにいた「統一派」メンバーである彼らは集まって、軍医（operatör）のジェミル・パシヤ³⁸を見方につけた。彼はシェイヒルイスラムの女婿で、非常に高い位についている人物だった。7月28日付けの『日刊科学の富』紙で、彼の声明が次のように掲載される。

「パーディシャーの命令により密偵が解散させられ、廃止されることが宣告されたのにも関わらず、最も恥知らずな密偵として知られているベイオール長官が治安大臣に任命された理由が私にはまったく理解できなかった。この新聞を通して問う。

軍医 ジェミル 」³⁹

このことに関してヒュセイン・ジャヒドも論文を書き、ジェミル・パシヤの声明文を飾ったが、この号はイスタンブルで爆発的に広まったという。密偵や密告、治安省の冷酷さに囲まれたトルコの青年らは「恐怖で煮立った船のボイラー」⁴⁰であった。彼らがバーブアリー坂のアフメット・イフサンの印刷所に押し寄せたことは大宰相府を驚かせ、同日、シェイヒルイスラムのジェマーレディン・エフェンディが、スルタンが憲法に従うことを誓ったことを宣言するという事態で収拾をみせた。

これは、第二次立憲制成立直後、宮廷と改革派との間で様々な駆け引きがなされた期間に、新聞というメディアの果たした役割を示す一例である。この翌日、10万2千人を超える人々が、政治犯や流刑囚の解放を求めてデモを行った。このときイフサンは、大宰相府に集まった群集から、囚人の解放について大宰相と交渉するよう依頼された。この交渉は

³⁷ M.H, p.130.

³⁸ Cemil Topuzlu(1868-1958)：トルコの現代外科医療の先達。1911年にイスタンブル知事となり、共和国時代には公の仕事に携わった。(M.H, pp.262-263.)

³⁹ M.H, p.133.

⁴⁰ M.H, p.134.

成功を見たのだが、このとき大宰相サイト・パシャは、まるでイフサン自身が「統一と進歩委員会」の発言力あるリーダーのように思ったようだといフサンは述べている⁴¹。彼は「統一と進歩委員会」のメンバーであったが、そこで重要な役職についたこともなく、一介のメンバーであるに過ぎなかった。

(中略) 私は立憲制を手にするために組織に入った一人のメンバーであった。大衆への抑圧支配をなくし、出版の自由をこの目にするため加わったのだ。私に政治的な情熱や願望は皆無だった。立憲体制により統治されるトルコで、出版行政の冷酷さから救われて、絵入りの新聞の発行と印刷業を続けながら自由に生きることが、私の唯一の望みだった。⁴²

これはおもしろい一文だと思う。アフメット・イフサンは本章の冒頭でも述べた通り、上流階級の生まれである。政府高官の中には彼の父親と交流のある人物が多くいたし、イフサンが官僚や政治家になる機会もいくらかもあつたはずである。回想録を読む限り、彼の出版業への憧れは、少年期から青年期を通してまったく揺らぐことなく確立されている。ダマスカスのスレイマン・スーディの家で、絵の入ったフランスの本や『*Journal de Voyage*』紙を見て衝撃を受け、その虜になったと述べている⁴³。それらはイフサンの育った家庭では見られることのないものだった。イフサンは亡くなるまで『科学の富』の発行を続けた。新聞のもつ民衆啓蒙といった性質は勿論だが、イフサンにとって何よりも重要だったのは新聞を自身の手で「作り出すこと」だったのではないだろうか。

立憲制宣言の後、およそ 10 日間におよぶ激務からくる過度の睡眠不足、栄養不足と精神の緊張がたたり、イフサンは心臓発作を起こしかけ失神するにいたつた。その静養中に、次のように述べている。

私はそのときが来るまで清い理想に、あつという間に政治的目的と利己心が混ざろうとは思ってもいかなかった。つまり青二才だったのである。同志のマフムド・サードックとともに、どこまでも清い立憲政治を望んでいた。そしてその他のことを私たちは考えられなかったのである。(中略) 私は決意していた。それは何を犠牲にしても、だんだんと激しくなる政治の陰謀と利益の流れに関係しないことであつた。そして私はそのようにした。そのため、この回想録を書くときも、非常に公正にペンを進められるだろうことを信じるものである。⁴⁴

革命直後のイスタンブルでは、港湾労働者とタバコ工場労働者から始まって、帝国各地

⁴¹ M.H, p.138.

⁴² M.H, p.138.

⁴³ M.H, p.18.

⁴⁴ M.H, p.146.

でストライキが広がっていた。また、アブデュルハミトが憲法の合意するところに反して、大宰相とシェイヒルイスラム、また陸海両大臣の任命権を有するという勅令を出し、「統一派」との駆け引きが始まるなど、様々な問題が浮上してきていた。上記の引用部はこういったことに対しての発言ではないかと思われる。8月25日、キャーミル・パシヤが大宰相に任命され組閣が行われた。イフサンは病気から回復すると同時に、政治的役割をも回避し、「改革の成功のため尽くす」という当初の目的は果たされたと見なして、本来の仕事に立ち戻ることに決めた。⁴⁵

1908年8月24日、イフサンは医者が進めに従いイスタンブルの熱気から離れるため、印刷所をマフムド・サードックに預けて外国旅行へ出かけた。1891年に印刷技術習得のためヨーロッパを訪問していたが、帰国後にオスマン帝国ではトルコ人の外国旅行が禁止されたため、これがイフサンの人生で二度目の海外旅行だった。⁴⁶ サロニカからアテネへ、そこからヴェネツィア、パリと回り、印刷に必要な機器や道具も購入してイスタンブルへ戻った。この旅行を通してイフサンが見聞し、それに対して抱いた感想は興味深い。これらは彼の信条や考え方を理解する上での一助となると思われる。イスタンブルからサロニカへ向かう船で、停泊中にイフサンはイスタンブルへ向かう「統一派」の指導者の一人のスピーチを耳にした。彼は、オスマン帝国の失った領地をすべて取り戻そうと語っており、それはイフサンが陸軍幼年学校で聞いたこととまったく同じ内容であったという⁴⁷。このことに対してこう語っている。

私たちには征服でなく改革が必要だったのだ。文明の道に入ること、知識と科学を信じること… なんと残念なことか、立憲制の創始のためにセラニキからイズミルへ、そしてイスタンブルへ向かっているこの「立憲制の番人」が何世紀も前の征服戦士らの言葉を使っている。⁴⁸

また、アテナには一日足らずの滞在だったが、その際にイフサンは、1908年の改革が、自身らに反対するようにとらえられていることをはっきりと感じたという。つまり、「我々が立憲制を打ち立てようと、ギリシアも含めヨーロッパは、我々に敵対心を持つことなく安心して発展の道を歩ませようなどといったことは毛頭考えてもいないのだ」と悟ったのである。どれほど改革を進めようと、決して西洋諸国に受け入れられることはなく、分割される運命にあったのが当時のオスマン帝国であったとイフサンは語っている。⁴⁹

帰国後にイフサンは再び印刷・出版業に復帰して、週刊の『科学の富』に再び文芸や科学知識の掲載を始めた。そして同紙で「Fecr-i Ati」と呼ばれる新しい文学派の形成が見

⁴⁵ M.H, pp.150-151.

⁴⁶ M.H, p.167.

⁴⁷ M.H, p.165.

⁴⁸ M.H, p.165.

⁴⁹ M.H, pp.166-167.

られ始めた。これは『科学の富』でレジヤイザーデ・エクレムやテヴフィク・フィクレトラによって文学革新運動が推進されてからのち、初めての文学運動であった。そのころイスタンブルでは、立憲制成立時のような人々の出版熱はすでに冷めていたため新聞の需要は減っていた。立憲制の宣言直後は、バーブアリー通りでは50を越える日刊新聞が新たに刊行されたが、そうした人々の多くはその借金にあえいでいる状態だったという。例外としては「統一派」から保護を受けていた『Tani n』紙や『Şura-yı Ümmet』紙があった。イフサンの『日刊科学の富』の経営は赤字状態で、加えてイスタンブルの政情は穏やかでなく、政治の争いごとに巻き込まれないようにする必要があった。事実、ハサン・フェフミという「統一派」に反対の立場をとっていた作家が、1909年4月5日、ガラタ橋の上で撃たれて殺されたのである。⁵⁰ イフサンはこの事件の後すぐに日刊紙を廃刊にした。ここでも、彼の政治的中立の態度がはっきりと見られる。

1909年4月13日、「3月31日事件」が起きる。反統一派の動きが顕在化する形で、イスタンブルの歩兵大隊が決起した。これにメドレセの学生が合流し、「シャリーアの復活」を叫ぶに至り、叛乱は制御の利かない状態に陥っていったのである。『Tani n』の印刷所が襲撃を受けて破壊され、統一と進歩委員会の『Şura-yı Ümmet』紙の印刷所も同じ道をたどった。彼らはバーブアリーへ、つまりイフサンの印刷所にも近づいたが、持ち主が「統一派」でもその協力者でもなかったことが幸いし、イフサンの印刷所は手をつけられずすんだという。⁵¹この騒動を受けて、1909年4月19日、イフサンは再び『日刊科学の富』の出版を始め「暗黒の無知と中世にふさわしい考えのもつ恐ろしい危険」を列挙した。このことについて、「既に無関心を決め込むことは私たちの印刷所に似つかわしくなかった」と回想録で述べている。⁵² 当時、イフサンはイスタンブルのアヤ・ステファノスに居を構えていたが、叛乱軍を鎮圧するため師団が整備された場所がここだった。この地の利によって、イフサンらは「行動軍」(Hareket Ordusu)の友人たちから情報を得るたびにバーブアリー坂の印刷所へ持ち込み、『日刊科学の富』に掲載し続けた。4月24日、シェヴケト・パシャを指揮官とする「行動軍」がイスタンブルに入って市内を制圧し、翌日戒厳令がしかれる。叛乱の首謀者が逮捕されて軍事法廷で裁かれた後、27日に、議会でアブデュルハミトの退位が採決された。

5 その後

その後の第二次立憲制期から独立戦争、共和国成立後まで、時代を追いながらイフサンの行動を簡単に紹介していく。

「3月31日事件」鎮圧後、政府内の権力闘争は続いていた。「アブデュルハミトの時代に

⁵⁰ M.H, p.176,285.

⁵¹ M.H, p.177.

⁵² M.H, p.180.

知識人が忌み嫌っていた、そして最も卑劣な仕事をしていた」というミフラン⁵³の出版していた『暁 (Sabah)』紙が、陸相シェヴケト・パシヤの保護を受けて、ほとんど公の刊行物になったことがイフサンを政治報道から完全に遠ざけさせ、イフサンは印刷所の経営を守るため思案していた。⁵⁴ この頃、彼の古い学友であるミュスタク・ベイがイフサンを訪れ、共同出版社を立ち上げることを提案した。ミュスタクは政治新聞の出版を志し、その資金も調達していたのだが、新聞屋のみでなく出版業も同時に経営することを望んでいたという。イフサンは彼の言う2万金貨という額については信用しなかったが、出資者の中に自身の信頼する数人の友人の名があったことからこれを承知し、次の条件を示した。

1. 彼らの出版する政治新聞に私はまったく関与しない。
2. 会社は有限出版会社となる。私が社長となり署名の権利は私のみが持つ。
3. 新聞は会社の印刷所で購読者の財産として印刷される。その収益が十分でない場合、会社資金からの調達は限定されるものである。⁵⁵

ミュスタクがこれを承知したため契約が交わされ、「アフメット・イフサンと共同者有限会社」(Ahmet İhsan ve Şürekası Komandit Şirketi) が設立された。実際の資金はこのときミュスタクの述べたものの半分ほどであったが、1910年に設立されたこの会社はその後10年間存続した。この出版社から『科学の富』の出版が続けられていく。

また、イフサンは共和国成立までの数年間に、出版業の傍ら様々なことをしている。

専制期に、トルコ人には出国が許可されていなかったことは既に述べたが、「3月31日事件」が落ち着いてから、イスタンブルでは外国周遊のブームが起こった。⁵⁶ヨーロッパへの周遊が多く計画され、議員や役人、商人、上級将校といった人々が参加していた。イフサンは当時、郵便局 (Posta ve Telegraf idaresi) から多くの仕事を請け負っていたのだが、印刷用紙の調達のためドイツに出かけた際に、そこで知り合ったドイツ人からドイツ旅行主催の協力を依頼され、『科学の富』としてこれを企画している。⁵⁷

1912年12月にはベイオール市長となった。当時イスタンブル知事だったジェミル・パシヤからの要請を受諾したのだが、その動機付けははっきりとしない。バルカン戦争の影響でイフサンの会社が不安定だったことも考えられる。およそ14ヶ月間、市長として道路・建物の整備、ごみ処理、公衆トイレの設置やタクシム広場の整備などに携わった。1913年1月、中央でクーデターがおこり「統一派」が権力を握った。それからおよそ一年後、イフサンは「統一派」が市の運営を彼らの管理下におこうとする兆しが見え始めるとすぐに自ら辞職した。

⁵³ ミフランはアルメニア系のオスマン人で出版者である。(M.H, p. 268)

⁵⁴ M.H, p.184.

⁵⁵ M.H, p.185.

⁵⁶ M.H, p.204.

⁵⁷ M.H, p.204.

また、1909年から1915年までの6年間、アリ商業学校（Ali Ticaret Mektebi）で経済地理を教えている。出版業に加え、市長職にあった時期も包括しているので相当多忙であったことが推察できるが、イフサンは次のように述べている。

私は疲れていた、しかしこの苦労をまったく惜しんでいなかった。私をととても喜ばせ、慰めてくれるものがあった。それは私の前にいる意欲的で情熱ある、そして国を学ぼうとしている親愛なる生徒たちだった。⁵⁸

イフサンは自身が行政学院で学んだように、世界における経済の重要性を教えた。彼がどのような教師であったのか推察する手がかりとして、生徒の一人が送ったという手紙の一部を紹介する。

私たちは商業や経済が何であるのかまったく知らずに先生にお会いしました。一年間、これらがどれほど偉大で重要であるのかを先生が教えてくださいました。私たちに世界を教えてくださいました。祖国の発展には怠惰ではなく、経済の活性が必要であることを教えてください、先生の授業を通して私たちは祖国をより愛し、発展させることを誓いました。⁵⁹

1915年、独立戦争のため生徒たちが兵士としてアンカラに送られたためイフサンも学校から離れた。大戦中に「アフメット・イフサンと共同者有限会社」はなくなり、戦後の列強による占領期はやむを得ず出版業を断念していたが、独立戦争で勝利し、共和国が成立してからは再び『科学の富』を世に送り始める。1929年にはスイス人のもつ印刷所とオーストリア人の経営する紙工場との共同経営で、新たに印刷会社を設立する。この印刷所でイフサンは1942年にこの世を去るまで働き続けた。

⁵⁸ M.H, p.189.

⁵⁹ M.H, p.190.

第二章 専制政治期と出版界

1878年2月14日、対ロシア戦争の混乱期にスルタンは議会を「一時的に」閉鎖し、憲法も停止した。これ以後、アブデュルハミトの専制支配のもと国内にスパイ網が張り巡らされ、町々は密告者であふれていった。出版に携わる者たちには襲撃されてその刊行物が廃刊に追い込まれる危険性が常にあり、それを免れても、厳しい検閲を避けることはできなかった。この章では、実際にアフメット・イフサンが経験した検閲について、また「アブデュルハミトへの恐怖」が出版界にどのような形で表れていたのか、いくつかの事例をあげながら見ていく。その一方で、アブデュルハミトに保護されながらその勢力を伸ばしていたのがババ・タヒルという人物である。彼の行動がイフサンと『科学の富』およびその作家たちにどう関わっていたのかも紹介する。

そして最後に、『科学の富』文学がどのような文学だったのかを概観するとともに、イフサンの目を通した彼らの姿を明らかにしていく。『科学の富』文学については、ヒュセイン・トゥンジェルの“*Servet-i Fünun Edebiyatı*”を参考にした。

1 検閲

(1) 政府年報

オスマン帝国では毎年、政府年報が発行されていた。そしてその年報の冒頭には必ず憲法の条文が記載され、そこには追放されたミドハト・パシャの名前すらあった。このことは、アブデュルハミトは憲法を「停止」したのであって「廃止」したのではないということ、つまりスルタンがあくまで議会の決定により行動していることを示すためであったといえる。⁶⁰

1902年、イフサンは「文官高等委員会 (Memurin-i Mülkiye Komisyon-ı Alisi)」から呼び出され、政府年報の訂正印刷を依頼された。先に出来あがった年報では、スルタンの即位について語られているページが上下逆に置かれていたのだという。このことが密告者によって「スルタンの失脚を狙っている」と曲解して報告されたことから、アブデュルハミトはこれを印刷した印刷所を閉鎖し⁶¹、担当官僚たちを罷免した。件の政府年報もすべて焼却処分となり、新たに作成が命令されたのである。

そのページは枢密院の書家によって書き直された。イフサンの提出したゲラは委員会の全員で検査され、署名され、封筒に入れられてイフサンの手元に戻った。さらにその印刷も委員会の立会いのもと行われるという徹底した注意が払われて作成されたのだが、この

⁶⁰ M.H, p.112.

⁶¹ このとき閉鎖されたのは国営印刷所の *Matbaa-i Amire* である。第二次立憲制成立後、1908年8月に再び開かれ、後に国立教育出版所 (*Milli Eğitim Basımevi*) となった。(M.H, pp.162-163, p. 278.)

官報は問題をもうひとつ引き起こした。印刷が済んで確認のためこれに目を通していき、イフサンは間違いを見つけた。スルタンの即位について、「ve'l-istihkak（権利を得て）」とあるはずの箇所が「ve la istihkak（権利を得ないで）」となっていたのである。これはその文体が複雑な花模様であったことにも起因して鮮明ですらなかったという。その後の様子を下に引用する。

私は委員会目指して走った。（委員長）ズィフニ・パシヤの御前にでた。パシヤは飛び上がった。フェスが頭から転がり、床に落ちた。そして叫んだ。

「ああ！ゲラはどこだ？」

（中略）委員会の人々はみな固まって、真っ青になっていた。私は署名入りのゲラをポケットにしまった。そのとき密告者として知られていたヒュセイン・ハミド・ベイが言った：

「署名入りのゲラはここに隠しましょう。印刷されたものはすぐに棄却しましょう。」

私は憤りながら「とんでもありません！署名入りのゲラを私は誰にも渡しません！」と叫んでいた！ズィフニ・パシヤは笑って、悲しそうに「イフサン・ベイが正しい。」と言った。委員会の話し合いの後、決定が下され、それはすぐに実行された。⁶²

この後、イフサンの印刷所の地下でそれらはすべて燃やされ、翌日には政府年報はあるべき姿でスルタンの御前に用意された。迅速な対応にヒュセイン・ハミドは手が出せなかったという。ズィフニ・パシヤはイフサンの父親の友人だった。そのためイフサンの人となりがある程度知っていたと思われる。その当時、前スルタン、ムラト5世はまだ存命だった。ここで起こった間違いは混乱を引き起こさせるには十分すぎるものだったのである。⁶³

（2） 泉の絵

1906年、アブデュルハミトの専制も終盤が近づいていた頃、キャウトハーネに新しく泉が作られたことから、『科学の富』にベシム・オメル・パシヤが水についての論文を書いた。そしてそれには、泉のそばで祈りを捧げる老人の絵が添えられることになっていた。しかしこの絵には検閲の許可が下りなかった。イフサンの問い合わせに対する当時の検閲長官カラ・ケマルの返答は次のものである。

泉の絵は本当にとっても素晴らしく、祈りはすべての信仰をもつものにとって神聖です。なぜならこれは私たちへの戒律なのです。しかし今日では悪い考えをもつ者がこれほど増えており、新聞に何を掲載し、何を省くかを判断するとき私は戸惑うのです。

⁶² M.H, p.113.

⁶³ M.H, p.114.

悪い考えをもつ者たちがこの素晴らしい絵を見た途端に『ああ、これをこの様にここで出版するところを見ると、遠まわしに我々の問題は祈るしかないということを言っているのだな』と思い違いをしてしまうことを私は十分に知っているのです、それを貴方がたに教えるために「問題有」としたのです。⁶⁴

(3) 検閲長官フフズ・ベイ

イブラヒム・フフズ(1862-1905)はギリシア出身の官僚である。検閲官として、また1901年からは印刷局長(Matbuat Müdürü)として『科学の富』と10年ほど関わった。専制期に合計5人の検察長官をイフサンは経験したが、中でもこのフフズ・ベイの時代に、最も厳しい検閲が始まったと述べている。フフズはイフサンを苦しめた人物であったが10年にわたる交際は徐々に親しいものになり、晩年病気に侵されて死期が近いことを知ると、イフサンに検閲のことで懺悔して、その許しを乞うたという。イフサンは彼のことを「野心の犠牲になった人」と形容している。⁶⁵

丁度15年、一日も欠かさず多くの危険と脅迫のリスクを負いながら、日中は大宰相府で、朝と夜はサラチハーネバシュの自身の屋敷で検閲を行い、召喚されては緊張しながら宮廷へと走ったこの人は、勲章や官位を授かり昇給もし、たくさんの寄進も行った。かわいそうなこの人は王冠を身に着けた人々が何であるのかを理解していなかったため、突然病気になってから毎日、パーディシャーから息災を尋ねられることを誇りに思っていたが、病気が重くなると宮廷から人がこなくなったことに心を痛めていた。検閲の仕事もできず、彼がベッドで苦しみの床にあった中、別の人物が彼の地位に取って代わった。⁶⁶

当然のことながら、出版者は検閲官に束縛されていたのと同様に、検閲官はアブデュルハミト2世の支配下にあったといえる。(1)の政府年報の例でも見たように、検閲官が間違いを犯す、つまりアブデュルハミトの意に沿わないようなことをすれば、たちまち帝国に張り巡らされていた密偵の知るところとなって、彼ら自身の地位や財産などが脅かされるのである。またフフズは高等教育を受けていない、軍隊式にいうなら「たたきあげ」の官僚だった。このことも彼の野心、出世欲に関係していたと思われる。

2 ババ・タヒルとアフメット・イフサン

イフサンと彼の印刷所および『科学の富』のライバルは、ババ・タヒルの通称で知られ

⁶⁴ M.H, p.118.

⁶⁵ M.H, p.71.

⁶⁶ M.H, p.71.

ていたメフメド・タヒルだった。ババ・タヒルは、バーブアリー坂に印刷所を作って 1895 年 3 月に『知識 (Malumat)』という雑誌を創刊した。彼は『知識』を密告の手段として利用し、多くの密告をアブデュルハミトに与えることでその地位階級を高め、スルタンから特別な保護を受けていた。『知識』は数回にわたって印刷省から無期停刊を命じられているが、いずれの場合もその翌日には大宰相から放免されている。とうとう、大宰相から停刊命令が出されたが、命令のなされたその日の夕方にはスルトンの命令で再出版許可が与えられるといった始末だった。⁶⁷ 『知識』という雑誌は、まさに『科学の富』の対抗馬であったといえる。この雑誌にも絵や写真の掲載があり、『科学の富』がヨーロッパに目をむけたトルコ文学を育てたのに対し、『知識』では古い伝統的文学が主な作品だった。⁶⁸

1895 年、レジャイザーデ・エクレムが『科学の富』に寄稿していた『太陽 (Şemsa)』という作品が、作者に無断でババ・タヒルの『知識』に転用されるという事件が起こった。⁶⁹ このことに対してレジャイザーデ・エクレムは『科学の富』に手紙を送り、自身の潔白を訴えながら謝罪した。1895 年 11 月 12 日付の『科学の富』でその手紙は全文が掲載されている。この事件の後、レジャイザーデ・エクレムはより頻繁にイフサンの印刷所を訪れるようになり、『科学の富』との仲がより打ち解けたものになったとイフサンは回想している。⁷⁰ この事件から数ヵ月後に、弟子であるテヴフィク・フィクレトが『科学の富』に加わったことを考えると、文学革新運動の始まりにババ・タヒル起こした転用事件が一役買っているといえなくもない。それと同時に、第一章で述べた通り、1901 年に『科学の富』を密告し停刊に追い込んだのもババ・タヒルであった。

1890 年代の後半、ババ・タヒルは「偉大な宮廷新聞屋」であった。多数の称号や勲章が彼のみでなく、作家や植字工、秘書といった彼の印刷所に関係する者にも与えられていた。これをイフサンの印刷所の者たちは羨望した。彼らの言い分は「ほかの印刷所と我々と何の違いがあるというのだ」というものだった。『科学の富』の作家のなかにはババ・タヒルの『知識』に作品を送り始めるものもいた。この考えは、印刷所の中で一種の病気のよう蔓延していたと述べている。イフサンは自身と何人かの作家を除いて、彼らに称号と勲章が与えられるよう申告した。これらのことはテヴフィク・フィクレトを激怒させたという。⁷¹ また、ババ・タヒル自身もこの勲章が原因となって 1903 年に逮捕されるに至った。ババ・タヒルは書家にわずかな報酬で証書を書かせ、市場で買った勲章を外国人に売っていたという。わずか 3 年間で何千もの勲章が売られたらしい。フェリド・パシャという人物が大宰相になるまでオスマン帝国では階級・勲章授与は日常茶飯事だったが、フェリド・パシャがそれを打ち切った。それにも関わらず『知識』で勲章授与の記事が出たことから注意を引き、大宰相府が検査するに及んだのである。「パーディシャーのみの神聖な権利で

⁶⁷ M.H, p.69.

⁶⁸ M.H, p.272

⁶⁹ p.78

⁷⁰ p.80

⁷¹ p.84-85

ある勲章授与」へ手を伸ばしたことからアブデュルハミトの怒りを買ひ、彼の印刷所の数名も法廷へ送られ、タヒルは15年の懲役刑を受けた。

3 『科学の富』とテヴフィク・フィクレト⁷²

(1) 『科学の富』文学

『科学の富』文学、または文学革新運動は、トルコ文学の1860年代から始まった西洋化の一端である。新オスマン人に代表される知識人たちは、政府批判を行っただけでなく詩や小説、戯曲など多数のヨーロッパ風トルコ文学を残しているため、タンズィマートの時代に文学の近代化も促されたといえる。もともと「文学革新運動」とはこの時代の文学活動に対して使われていた言葉である。そのため、これを引継いで発展した『科学の富』文学に対しては「新文学革新運動」ともいわれる。

1896年、テヴフィク・フィクレットが『科学の富』に加わり、さらにハリド・ズィヤ、ナービザーデ・ナーズム⁷³、ジェナプ・シャハベッティン⁷⁴、アリ・エクレム⁷⁵、アフメト・ヒクメット⁷⁶、ヒュセイン・ジャヒト、メフメット・ラウフなど、ほかにも多数の作家が『科学の富』に寄稿し始め、文学誌としての地位が確立される。1898年の全盛期にはファイク・アリ⁷⁷、イスマイル・サハ、メフメト・エミン⁷⁸らも加わった。『科学の富』ではおもに誌と文学批評が盛んで、彼らの文学への批判に対して、彼らの正当性を訴え、作品においてもそれを証明しようと試みた。

この文学の主な特徴は、「芸術のための芸術」という理解が見られ、民衆から遠く離れていたということにある。『科学の富』文学は一種のサロン文学であり、作品のテーマや感情、思考スタイルは、エリート階級もしくは西洋化した人々に限定されたものであった。加えて、使用された言葉はひどく難解で貴族的なものであり、民衆に語りかけるという性質を

⁷² この節では、Hüseyin Tuncer, *Servet-i Fünun Edebiyatı(Arayışlar Devri Türk Edebiyatı ii)*, Akademi Kitabevi, İzmir, 1992, pp.1-8. を主な参考文献とした。

⁷³ Nabizade Nazım (1862-1893): イスタンブルに生まれる。軍事学校で学び、将校として働く。病気疾患のため夭逝した。(E.T, p.712.)

⁷⁴ Cenap Şahabettin (1870-1934): マナストゥルで生まれる。イスタンブルの医学校を卒業後、パリで4年間、医学と文学を学ぶ。帰国後、医師としてさまざまな官僚職につく。退官後一時期、大学でフランス文学とトルコ文学を教えた。(E.T, p.729.)

⁷⁵ Ali Ekrem Bolayır (1867-1938): イスタンブルに生まれる。ナムク・ケマルの息子。侍従書記官などを務め、共和国成立後はイスタンブル大学の教授となった。(E.T, p.732.)

⁷⁶ Ahmet Hikmet Müftüoğlu(1870-1927): イスタンブルに生まれる。ガラタサライで学び、陸軍省(Harciye Vekaleti)に勤める。数カ国に領事として派遣された後、陸軍省の参事官(müsteşar)となった。(E.T, p.741.)

⁷⁷ Faik Ali Ozansoy (1875-1950): ディヤルバクルに生まれる。行政学院で学び、後にディヤルバクル知事となった。一時期、行政学院でフランス語を教えた。(E.T, p.732-733.)

⁷⁸ Mehmet Emin Yurdakul (1869-1944): イスタンブルに生まれる。官僚となり、知事職にも就いている。解放戦争の際、アナトリア各地を回り、祖国や国民、独立などの詩を詠んだ。(E.T, p.792.)

持ち合わせてはいなかったという。タンズィマートの時代に、ナムク・ケマル⁷⁹は「オスマン語」の簡略化、民衆に民衆の言葉で語りかけるという観念を主張していたが、もし『科学の富』時代の作家らが彼の主張を取り入れていたならば、彼らのトルコ文学史における意味やその価値も、まったく違ったものになっていただろうと推測されている。

もともと、オスマン語はペルシア語やアラビア語からの借用語が多いトルコ語であるが、『科学の富』に集った作家らはそれをさらに促進した。しかし、発行人であるアフメット・イフサンは当初から簡素なトルコ語を好んだようで、彼が執筆した記事においても比較的、隠語を使うことはなかったという。⁸⁰ このことに関する彼の回想を下に引用する。

難解な言葉を使い、多くのアラビア語やペルシア語の単語で文章を書くことを好み、そしてそれこそが芸術だと思ひ、誇りに思っている人々は、機会あるごとに私がアラビア、ペルシア語の文法を知らないことを非難していた！（中略）トルコ語をトルコ人たちが話しているように記述する風潮をつくることで、とくにラテン文字の受け入れにより私は言葉にできないほど喜んだ。もう誰も私に私が文字を知らないなどと言わないだろう。以前信じられていたところでは、言葉を知ることとはアラビア語、ペルシア語の文法を知ることだった。作家らはこれらの言語の言葉を取り入れ、私たちが聞いたことのない言葉を見つけてそれを使うたびに、書くたびに、得意満面となっていた。⁸¹

彼らはトルコ語の基本文法からも逸脱し、オスマン語の進化形とでもいうべき「科学の富語」と名づけられた特別な言語を作り出した。こうしたことが起こった理由として、フランス文学が彼らの模範であったことが挙げられる。あるフランス語の単語や修辞法に該当するトルコ語表現がなかったため、ペルシア語やアラビア語からそれらを借用が行われたのである。西洋文明の新しい見解、感情、思考は、こうした言語を通してオスマン世界に入っていた。このことはトルコ語の純化という観点からは明らかに有害であったが、より豊富な表現の可能性の発見に貢献したといえる。

(2) テヴフィク・フィクレトとアフメット・イフサン

テヴフィク・フィクレトは『科学の富』の主筆を務めた人物である。科学の富文学の作家らは若干の例外を含み、詩人はテヴフィク・フィクレトの、そして小説家や散文家はハリド・ズィヤの影響を受けていたという。このため、科学の富文学に対しては、「テヴフィク・フィクレトーハリド・ズィヤ派」ともいわれる。

⁷⁹ Namık Kemal (1840-1888): テキルダールに生まれる。翻訳局に勤務した後、国の内外でさまざまな論説を書いて政府批判を行った。1873年、キプロスに流される。1876年に恩赦が出てイスタンブルへ戻り、第二次立憲制の制憲委員会の一員となる。(E.T, p.648-650.

⁸⁰ M.H, p.6, p.98.

⁸¹ M.H, pp98-99.

イフサンのテヴフィク・フィクレトに対する評価は以下のとおりである。

彼は天使のようにやさしく高潔で、欠点や過ちから逃れた魂をもっていた。テヴフィク・フィクレトはすべてのことを名誉と誇りの天秤にかけていた。名誉や誇り、そして国と家族への義務に沿わない行動のすべては、根本では無実で簡単に許される過ちであっても、彼の目から見れば有罪であった。(中略) フィクレトを、私たちの前に現れた神のように、そして公正な裁判官のように私たちは見ていた。彼のちょっとした批判を受けることを望まず、そして誰かを良心の法廷へ差し出す恐怖に震えていた。

テヴフィク・フィクレトはこの世で生きていけないくらい厳しく、整然とした人だった。彼の考え思い巡らせた正直な人柄は、言ったように天使に近づいていた。彼は人生の成り行きが認めさせる融通性さえも知らなかった。⁸²

また、このような彼の性格について次のように語っている。

テヴフィク・フィクレトの父親はアッカの長官だった。彼には父親から毎月 15 金の小遣いが届いていた。アクサライには目のくらむような家があった。つまり何も必要なかったのだ。彼は腹を立てたとき、ロバート私立高校の先生になった。私はいつも自分に問うた。テヴフィク・フィクレトはこのような豊かさの中にいなかったならば、このように誇張された意向に固執できていただろうかと。自分に聞いたこの質問への答えは与えられなかったし、今でも分からない。⁸³

1901 年に『科学の富』が停刊処分を受ける前に、テヴフィク・フィクレトは『科学の富』から完全に離れた。アフメット・イフサンとの不仲が生じたためというが⁸⁴ その直接の原因ははっきりしない。先に述べたように、彼は『科学の富』の仲間がタヒルの『知識』に寄稿したことに怒りを隠さなかったし、勲章を受け取ったことも、それをイフサンが許したことも許さなかった。こうしたことが彼らの間に溝を作ったことは推測できる。回想録では、科学の富文学についてはページがそれほど割かれていないが、テヴフィク・フィクレトの思い出は多く語られている。『科学の富』文学にとってだけでなく、イフサンにとってもテヴフィク・フィクレトは特別な存在であったのだと思う。

⁸² M.H, p.82

⁸³ M.H, p.85

⁸⁴ *Servet-i Fünun Edebiyatı*, p.4

終わりに

アフメット・イフサンは新聞の刊行に人生を捧げた人物だった。新聞で収入が得られないときも『科学の富』を見捨てることはなかったし、株式会社を設立したのは、自分がこの世を去った後も『科学の富』と彼の印刷所が存在し続けるためだったという。⁸⁵ 彼にとって新聞はヨーロッパと、つまり進歩とつながっていたものだったと思われる。新しい印刷技術を導入し、紙面に絵や写真を掲載しながら新しい知識を紹介し、ヨーロッパ風トルコ文学の興隆を支えた。また、イスタンブルがアブデュルハミトの専制期に始まって、オスマン帝国からトルコ共和国への転換期と揺れ動く中、イフサンは経済的にも思想的にも、結果としてどこの傘下にも入らなかった。この独立した姿勢が『科学の富』を長く生き残らせたのではないだろうか。

本論文はアフメット・イフサン自身の回想録を第一の資料としたが、比較検証が不足している。ほかの印刷所や新聞・雑誌との比較を、数値を示して詳しくできれば、イフサンの出版活動に対してより明快な評価ができたのではないか。また、彼の「生涯を通しての出版活動」を理解するためには、共和国成立後の出版界におけるイフサンの活動と、その位置づけを調べるのが今後の課題となる。

⁸⁵ M.H, p.51.

参考文献一覧

日本語文献

新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001

外国語文献

Vasfi Mahir Kocatürk. *Büyük Türk Edebiyatı Tarihi* Edebiyatı Yayınevi, Ankara, 1970.

Ahmet İhsan Tokgöz, *Matbuat Hatıralarım*, Alpay Kabancı haz. İletişim Yayınları, İstanbul, 1993.

Hüseyin Tuncer. *Servet-i Fünun Edebiyeti(Arayışlar Devri Türk Edebiyatı II)*, Akademi Kitabevi, İzmir, 1992.

参考資料

- 図 1. アフメット・イフサンと印刷所の様子
- 図 2. アフメット・イフサンの肖像 (1)、1891年撮影
- 図 3. アフメット・イフサンの肖像 (2)、1927年撮影
- 図 4. 『科学の富』付録冊子の表紙